

大学生のための

レポート作成 ハンドブック

三重大学全学共通教育センター



大学の授業では、成績評価の方法のひとつとして、レポートの提出を求められることがよくあります。レポートは、感想文やエッセイとは違い、自分の考えだけを述べればよいというものではありません。いくつかの大切なことがあります。少なくとも次の3点を守ったレポートには、よい成績が与えられることでしょう。

- (1) 与えられたテーマに関する図書や雑誌記事や新聞記事などを調べ、それらの資料の内容に基づいて論旨を展開します。
- (2) 資料に書かれていることを、あたかも自分の意見であるように書いてはいけません。他人の意見（資料に書いてあること）と自分の意見は、はつきりと区別します。
- (3) 読み手が理解しやすいように論理的に文章を組み立て、話し言葉ではなく、書き言葉を使って書きます。

それでは、これから、「森林破壊」という課題を与えられたものとして、レポート作成の基本を勉強しましょう。

このハンドブックの巻末には、「森林破壊」をテーマとした「レポートモデル」が載せてあります。説明に使われている例も、このレポートモデルから引いてあります。初めに、レポートモデル全体を一読してみると、わかりやすいでしょう。

目 次

1 資料収集とアウトライン	1
2 情報を整理する	3
2.1 文献リストを作る	3
2.2 情報を保存する	4
3 出典を明記する	6
<コラム> レポート作成 それは科学への第一歩—研究倫理への扉	9
4 注をつける	10
5 直接引用と間接引用	12
6 レポートの文体	14
6.1 「である体」の文末表現	14
6.2 「事実を述べる文」と「意見を述べる文」	15
6.3 「話し言葉」と「である体」	16
6.4 文の長さ	17
6.5 読点の打ち方	18
7 序論を書く	21
8 本論を書く	23
8.1 段落を変える	23
8.2 「導入の段落」と「結びの段落」	25
8.3 段落と段落のつながり	27
8.4 項目を挙げることは	28
9 結論を書く	30
9.1 「本論のまとめ」の書き方	30
9.2 「今後の課題」の書き方	32
10 図や表の扱い方	33
10.1 図や表の通し番号と題名	33
10.2 図や表の説明	34
11 レポートを提出する前に	35
11.1 原稿の見直し	35
11.2 仕上げ	35
<参考文献>	37
〔付録〕 レポートモデル	38
あとがき	47

1

資料収集とアウトライン

「森林破壊」に関する資料を集め、それらにざっと目を通しながら、レポートのアウトラインを考えます。アウトラインとは、レポートの骨組みのことです。「森林破壊」について何を、どんな順序で書くかを、ローマ数字、アルファベット、アラビア数字などを使って全体の構造が見えるように、簡潔に表します。まず、どんなレポートにも共通する第一段階のアウトラインは、以下の三つです。

(例 1)

- I. 序論
- II. 本論
- III. 結論

序論は、これから本論で何を書くのかを短く述べた予告編のようなものです。結論は、本論で述べたことを簡潔にまとめ、レポート全体を締めくくります。したがって一番長いのは本論の部分です。アウトラインも、本論の部分が細かく分かれています。

(例 2)

- I. 序論
- II. 本論
 - A. 「森林破壊」の実態
 - B. 「森林破壊」の要因
 - C. 対策
- III. 結論

次の段階では、本論の部分がさらに細かく枝分かれします。

(例3)

- I. 序論
- II. 本論
 - A. 「森林破壊」の実態
 - 1. 東欧の森林破壊
 - 2. 热帯雨林の破壊
 - B. 「森林破壊」の要因
 - 1. 商業用伐採
 - 2. 農用地開発を目的とした伐採
 - 3. 輸送道路建設を目的とした伐採
 - C. 対策
 - 1. アグロフォレストリー
 - 2. 住民主体の森林利用と管理
- III. 結論

アウトラインは、資料を集め、読みこなす過程で、何度も書き直します。まだ資料がほとんど集まっていない段階では、「こんなレポートにしてみたい」という自分のアイディアを中心にアウトラインを作ってみます（初期アウトライン）。資料が集まって来ると、初期アウトラインにうまく当てはまる資料もあれば、それ以外の資料も出てきます。そこでアウトラインを修正していきます。レポートは資料に基づいて書かなければなりませんから、どんなに自分が書きたいことがあってもそれをサポートする資料が見つからなければ、その部分はあきらめなければなりません。反対に、初期アウトラインでは思いつかなくても、資料に当たった結果、大切な事柄に気づくことがあります。それは早速アウトラインに加えましょう。

2

情報を整理する

2.1 文献リストを作る

図書館やコンピュータによる検索装置を利用して、図書、雑誌記事、新聞記事、インターネット情報などの資料が見つかったら、それらを片端から「文献リスト」に加えて行きます。レポートに使用した文献のリストは、レポートの最後に付けるものですが、うっかりしていると、せっかく見つけた文献情報が散逸してしまい、後でそれらを再検索するという二重の手間がかかります。

文献リストの書き方は、図書、雑誌記事（論文）、新聞記事などの場合、それぞれ少しずつ違います。図書に関して、必要な情報は、著者名、書名、出版社、出版年の4つです。雑誌記事や論文の場合は、著者名、記事または論文のタイトル、掲載雑誌名、号数や巻数、掲載ページ、出版社（学会誌の場合、必要ありません）、出版年が必要です。

新聞記事は、記事の見出し、新聞名、発行年月日、朝夕刊の別、掲載面（ページ）の順に書きます。署名記事の場合は、執筆者名も必要です。最近では、新聞記事はデータベースを使って検索できるようになっていますから、その場合、検索情報を最後に（　）に入れて付け加えましょう。

（例 1）

図書の場合：

長谷川三雄（1996）『人間と地球環境』産業図書。

雑誌論文の場合：

町田修三（2000）「森林破壊と国際貿易—現状と対策—」『日本貿易学会年報』vol.37, pp.116–121.

新聞記事の場合：

加藤学「<私の視点> 違法伐採『疑わしい木材』の監視を」朝日新聞, 2004年10月20日, 朝刊, 14面（朝日新聞記事データベース：蔵書 DNA for Libraries より検索）

このような文献に関する情報の並べ方にはいくつかの違った書式があります。レポートモデルで採用した書式は、人文、社会科学の分野でよく使われる書き方のひとつです。この場合、以下の点に注意してください。日本語の文献リストは、著者名のあいうえお順に

並べます。欧文のリストの場合はアルファベット順に並べるのが普通です。また、ワープロソフトで入力する場合、アルファベットや数字は半角で入力します。レポートモデルの最後にある文献リストを参照してください。

他方、自然科学などの分野では、()、「」、『』等を省略し、情報をコンマ (,) で区切っていくようなやり方も一般化しつつあるようです。そのような自然科学分野での文献リストの作り方をレポートモデルの図書と論文に当てはめてみると以下のようにになります。

(例2)

長谷川三雄, 人間と地球環境, 産業図書, 1996.

町田修三, 森林破壊と国際貿易—現状と対策—, 日本貿易学会年報, 37, pp.116–121, 2000.

したがって、分野によってさまざまな書式があり、上記の例に限定されるわけでもありません。自分のレポート執筆のために集めた文献のそれぞれがどのような書式を採用しているか見てみましょう。大切なことは、ひとつの文献リストには同一の書式を採用し、文献リスト全体に一貫性をもたせることです。

2.2 情報を保存する

貸し出し期限までに返却しなければならない図書館の文献は、早めに目を通した後、レポートに使えそうな情報が載っているページをコピーしたり、情報内容をノートに書き留めたり、自分のパソコンに入れておきます。そのとき、情報の載っていたページ番号を忘れずに書き留めておきます。

さらに注意しなければならないことは、文献から一字一句違えずにそっくり抜き出した情報（直接引用）と、自分で適当に表現を変えたり要約した情報（間接引用）をはっきり区別しておくことです。最も一般的で簡単な方法は、前者（直接引用）の場合は、全体を「」の中に入れておくことです。

(例3)

直接引用の場合：

「枯れ木、そのまた向こうにも枯れ木の山がつづく。骨格がむき出しになった立ち木と、林床に積み重なる倒木。黒く変色した幹の皮がむけて、白い肌がむき出しになっている。山麓でさえずっていた鳥の鳴き声が聞こえない。風が通り過ぎると、葉ずれの代わりに枯れ枝がカタカタ鳴る。遠くからギーッと枯れ木の倒れる悲鳴が聞こえてくる。」（石2002: 145）

それに対し、直接引用をするつもりのない情報については、適当な要約文ないしメモ書きにしておいて、実際にレポートを書くときに表現を工夫します。

(例 4)

間接引用（要約）の場合のメモ書き：

アマゾンのアグロフォレストリー

焼畑を作る→1年生作物を植える→間に多年生作物を植える→果樹や木材価値のある木々（高さ 30-40m になる）を植える→20-30 年で大きな森のような畑になる（西沢他 2003: 57）

ちなみに、このメモ書きの元の文章は以下の通りです。

(例 5)

最初に、木々を伐採して焼畑をつくります。そして、そこに陸稻やトウモロコシなど1年生作物を植えます。その間にコショウやパッショングルーツなど多年生作物を植え込み、さらに果樹や高さが 30-40m にもなる木材的価値のある木々を、自然植生の遷移をまねた形で植えていきます。こうするうちに、20-30 年すると大きな森のような畑になります。

直接引用及び間接引用をレポート上にどのように表すかについては、後で説明します。

(→5. 直接引用と間接引用)

3

出典を明記する

一番初めのところで、図書や雑誌記事や新聞記事などの資料に書いてある他人の意見と、自分の考えとははっきり区別しなければならないと述べました。本論の中でこの二つを区別するためには、資料から得た情報に関して必ず出典を明記することが必要です。レポートモデルの本論を見ていくと、あちこちに括弧書きで、人の姓や年号などが挿入されているのに気がつきます。それが出典情報です。

(例 1)

そればかりではない。地球上に 1,900 万 km² 存在し、世界の森林面積の半分を占める熱帯雨林が、毎年本州の総面積 23 万 km² の約 3 分の 2 に当たる 14.6 万 km² ずつ失われていると言う（大塚 2005: 8）。また、長谷川（1996: 46-47）は、1980 年に 19 億 1,000 万 ha（1,910 万 km²）もあった熱帯雨林が、1990 年には 17 億 5,600 万 ha（1,756 万 km²）となり、10 年間の年平均で約 1,540 万 ha（15.4 万 km²）が減少していると指摘している。さらに、町田（2000: 117）は、FAO（世界食料農業機関）のデータに基づき、開発途上国における熱帯雨林の消失実態を、表 1 にまとめている。

この段落では、出典情報の書き方として二つの方法が出てきました。最初は、文末の括弧の中に、著者の姓と出版年、そしてコロン（：）の後にその情報が載っているページ番号が書かれています。二つ目と三つ目は、著者の姓を主語にして文が書かれているため、姓は括弧の中に入っています。姓のすぐ後の括弧の中には出版年とページ番号だけが入ります。情報が複数のページにまたがって載っている場合は、その最初のページと最後のページをハイフン（-）でつないで書きます。出典情報として文中で必要なのは、基本的にこの三つです。なぜなら、これだけあれば、レポートの最後に載せる文献リストを見ることによって、どの文献を指しているのか分かるからです。

また、複数の文献から得た情報をまとめて記述するときには、出典情報は（例 2）のように書きます。この場合、情報量が増えて、複数の文で構成するが多くなりますから、どこからどこまでが、それらの文献から得たものなのかをはっきりさせるためには工夫が必要です。

(例 2)

まず、耕作地開発から見てみよう。大塚や市川によれば、現地住民による焼き畑農地は、ますます拡大しているという。しかし、ここで問題なのは、いわゆる伝統的な焼き畑耕作ではない。焼き畑耕作は、かつては低人口密度のもと、長い休閑期間をおきながら持続的に行われてきた。しかし、そのシステムはすでに限界に達し、新しい原生林開拓へ拍車がかかっている（大塚 2005：8；市川 2003：45）。

(例 2) では、まず、「大塚や市川によれば」というように、文頭に著者名を挙げ、最後に括弧書きの出典情報をまとめて出しています。このように、複数の文献から得た情報の始めと終わりで出典を示唆することによって、どこからどこまでがそれらの文献に基づいているのかということが読者に間違いなく伝わります。なお、ひとつの括弧の中に複数の出典情報を入れる場合、各文献の情報はセミコロン（；）で区切ることに注意してください。

また、Web ページから得た情報やデータベースで検索した新聞記事などは、注を付して出典情報を書きます。注の付け方については、次の章で説明します。（→4. 注をつける）

ここで、次の章に行く前に、自然科学などの分野でよく使われるごく簡単な出典の書き方を例示しましょう。この方法では、本文には出典番号のみが挿入されます。

(例 3)

そればかりではない。地球上に 1,900 万 km² 存在し、世界の森林面積の半分を占める熱帯雨林が、毎年本州の総面積 23 万 km² の約 3 分の 2 に当たる 14.6 万 km² ずつ失われていると言う[1]。また、長谷川[2]は、1980 年に 19 億 1,000 万 ha (1,910 万 km²) もあった熱帯雨林が、1990 年には 17 億 5,600 万 ha (1,756 万 km²) となり、10 年間の年平均で約 1,540 万 ha (15.4 万 km²) が減少していると指摘している。さらに、町田[3]は、FAO (世界食料農業機関) のデータに基づき、開発途上国における熱帯雨林の消失実態を、表 1 にまとめている。

これらの出典番号 ([1]～[3]) は、参考文献リスト上の個々の文献に付けられた番号と対応します。この場合は、参考文献リストの文献の並べ方は、先に述べたような著者名の「あいうえお順」や「アルファベット順」ではなく、出典番号順になります。次の（例 4）を見てください。

(例4)

＜参考文献＞

- [1] 大塚徳勝, 知っておきたい環境問題, 共立出版, p.8, 2005.
- [2] 長谷川三雄, 人間と地球環境, 産業図書, pp.46-47, 1996.
- [3] 町田修三, 森林破壊と国際貿易—現状と対策—, 日本貿易学会年報, 37, pp.116-121, 2000.

この例では、[1]と[2]は図書であり、ページ数は引用箇所のみを明示しています。他方、[3]は、学会誌に掲載された論文全体のページ数のみを記しています。比較的短い論文の多い自然科学などの分野では、このように、引用箇所を限定して明示することにはこだわらないこともあるようです。

<コラム>

レポート作成 それは、科学への第一歩 ——研究倫理への扉——

文系・理系を問わず、日本の科学者の意見をまとめ、国の内外に対してそれを発信する代表的な機関として日本学術会議という組織があります。この機関が、科学者が守るべき事項をまとめた「科学者の行動規範」には、科学について、以下のように記載されています。

科学は、合理と実証を旨として営々と築かれる知識の体系であり、人類が共有するかけがえのない資産でもある。また、科学研究は、人類が未踏の領域に果敢に挑戦して新たな知識を生み出す行為といえる。一方、科学と科学研究は社会と共に、そして社会のためにある。したがって、科学の自由と科学者の主体的な判断に基づく研究活動は、社会からの信頼と負託を前提として、初めて社会的認知を得る。(声明「科学者の行動規範」改訂版、日本学術会議、平成25年1月より)

そして、こうした科学に取り組む者には、それぞれの分野での専門家としての社会に対する責任があるばかりではなく、常に倫理的な判断と行動が求められています。

大学に入學し、教養教育と専門教育を受けたあと、皆さんはそれぞれの進路を目指してさらに未来へと進みます。大学で学ぶ学生のすべてが、将来、科学に取り組む者になるわけではありません。しかし、皆さんは、これから卒業に向けて、指導教員の下に、それぞれの分野で未知なるものを明らかにしたり、新たな知識を得たり、新たな技術をつくったりする活動、つまり**研究**に取り組み、その成果をまとめ、卒業論文という形で**発表**することになります。

研究成果を発表するにあたって、事実とは異なる存在しない内容を記載したり、得られた結果を事実とは異なる形に加工して示したりすることがよくないということは、誰もが理解できるでしょう。これらの行為は、研究活動においては、それぞれ**ねつ造**、**改ざん**と呼ばれる不正行為に当たります。

また、この『レポート作成ハンドブック』には、「出典を明記する」、「直接引用と間接引用」について説明があります。これらは、皆さんがレポートを作成するにあたって、皆さん自身が明らかにしたり、考えたりした内容と、既に世界の誰かによって明らかにされ、それが公表されている内容とを明確に区別するために必要な作業です。これがきちんと行われていなければ、他人のアイデアや方法、データ、結果をあたかも自分のものであるかのように示すことになり、研究活動における**盗用**・**剽窃**という不正行為を犯しかねません。

レポートの書き方を学ぶことは、研究をすることと深い関係にあることを理解し、このハンドブックに書かれていることを確実に身に付けてください。

4

注をつける

注の付け方には、大きく分けて脚注と後注があります。脚注 (footnote) は、注を要する句や文と同じページの最下部に注そのものを入れるやり方であり、後注 (endnote) は、本文が終わった後、文献リストの前にまとめて全部の注を順番に記すやりかたです。最近は、ワープロソフトの発達により、手作業ではなかなか難しい脚注を簡単に挿入することができるようになりました。脚注の利点は、本文の中で注の記号が出てきたとき、その都度後ろまでページを繰る必要がなく、同じページの下の部分にその内容が記されているので、注を読み易いということです。そこで皆さんも、ワープロソフトを使ってレポートを書く場合は、ぜひ脚注挿入の機能をマスターしてください。

注に入れる内容は、先にも述べたとおり、Web ページから得た情報やデータベースで検索した新聞記事などの出典情報と、本文の補足説明の二種類があります。まず、以下の例を見ましょう。

(例 1)

3. 热帯雨林の破壊の要因

热帯雨林の破壊では、木材の乱伐、烧畑農地の拡張、薪の採取、家畜の過剰放牧、都市化による開発などが主な原因として指摘されている（大塚 2005: 8; 長谷川 1996: 46-47; 気象庁のホームページ¹⁾）。これらを分類すると、3種に大別できる。すなわち、第一に商業用を目的とした伐採、第二に農耕地開発を目的とした伐採、第三に輸送道路建設を目的とした伐採である。以下、各々、具体的に見てみよう。

(1) 商業用を目的とした伐採

商業用を目的とする場合には大きく、材木用と、エネルギー源としての薪用がある。材木用に伐採される場合は、そのほとんどが他国へ輸出されている。この伐採には、合法的なものだけでなく、非合法的な伐採も含まれる。小池（2003: 106）によれば、アマゾンでは違法伐採、密輸が横行しており、85%から 90%が違法伐採になるという。インドネシアの場合でも、「政府が許可した伐採量と輸入国の統計の差から違法伐採を推定すると、生産量の 7 割に達する」という²⁾。

¹⁾ <http://www.kishou.go.jp/know/whitep/3-3-5.html> (2005 年 12 月 9 日検索)

²⁾ 加藤学「<私の視点> 違法伐採『疑わしい木材』の監視を」朝日新聞, 2004 年 10 月 20 日, 朝刊, 14 面 (朝日新聞記事データベース : 聞蔵 DNA for Libraries より検索)

脚注を見ると分かることおり、¹⁾はWebページからの情報の出典であり、²⁾は新聞記事をデータベースを使って検索した場合の出典の書き方です。

では、次の（例2）を見てください。これは補足説明のための脚注の例です。

(例2)

他方、井上（2003: 168-169）は、森林を利用してそれを管理していく主役は、「あくまでも森林地域に居住した森林資源に頼って生活している人々である」と主張する。具体的には、東カリマンタン³⁾における地方分権化と森林政策の動向、および住民の取り組みが報告されている。

³⁾ カリマンタン島（ボルネオ島）におけるインドネシア領の1州。

5

直接引用と間接引用

直接引用とは、文献資料の中の一部を、一字一句違えずにそのまま引用することを指します。直接引用の仕方には二つあります。まず、引用する部分を鍵括弧（「　　」）で括り、前後に地の文（レポート作成者の書いた文）をつけるやり方で、比較的短い引用の場合にこの方法を使います。（例1）のa) b)は、いずれもレポートモデル「3. 热帯雨林の破壊の要因」からの例です。

（例1）

a) インドネシアの場合でも、「政府が許可した伐採量と輸入国の統計の差から違法伐採を推定すると、生産量の7割に達する」という²⁾。

2) 加藤学「<私の視点> 違法伐採『疑わしい木材』の監視を」朝日新聞, 2004年10月20日, 朝刊, 14面（朝日新聞記事データベース：蔵 DNA for Libraries より検索）

b) 加えて、山元（1989: 159）は、大規模なプランテーション開発や、家畜の過剰放牧などの問題が「原住民の昔からの焼き畑農業を凌駕している」と指摘する。

直接引用のもう一つの方法は、比較的長い引用部分を、地の文とは区別して表します。

（例2）

2. 森林破壊の実態

石弘之は、東欧を訪ねて目の当たりにした森林破壊の状況を次のように描写し、それを「森林の墓場」と呼んでいる。

枯れ木、そのまた向こうにも枯れ木の山がつづく。骨格がむき出しになった立ち木と、林床に積み重なる倒木。黒く変色した幹の皮がむけて、白い肌がむき出しになっている。山麓でさえずっていた鳥の鳴き声が聞こえない。風が通り過ぎると、葉ずれの代わりに枯れ枝がカタカタ鳴る。遠くからギーッと枯れ木の倒れる悲鳴が聞こえてくる（石 2002: 145）。

これらの樹木は、酸性雨により枯死するに至ったものであり、チェコ、ポーランド、旧東ドイツの国境地帯に、幅数十km、長さ数千kmにわたって広がっている。

この（例2）の、「枯れ木、そのまた向こうにも・・・・悲鳴が聞こえてくる」が直接引用です。このように、地の文との行間を広げたり、活字を小さくしたり、字体を変えたり、左右をインデントして、地の文と区別します。

ただし、このような長い引用は、滅多にするものではありません。要約してしまうとその表現の真価が失われたり、部分的に地の文に組み込むことが難しいような箇所のみ引用します。このレポートモデルでも、長い引用はこれひとつだけです。

ここまでで直接引用の方法をふたつ説明しました。これら以外で、文献資料に基づいて書いているところはすべて間接引用（要約）と呼びます。間接引用とは、文献資料にある情報を、レポート作成者が自分の言葉で書き直したり要約して載せたところを指します。レポートの引用箇所の大部分がこの間接引用で占められるのが普通です。したがって、レポートモデルの中には間接引用の具体例がたくさんありますが、ここでは、「2.2 情報を保存する」のところで例示したアグロフォレストリーの要約表現を見ることにしましょう。

（例3）

●資料の原文：

最初に、木々を伐採して焼畑をつくります。そして、そこに陸稻やトウモロコシなど1年生作物を植えます。その間にコショウやパッションフルーツなど多年生作物を植え込み、さらに果樹や高さが30-40mにもなる木材的価値のある木々を、自然植生の遷移をまねた形で植えていきます。こうするうちに、20-30年すると大きな森のような畑になります。



●保存されていた情報：

アマゾンのアグロフォレストリー

焼畑を作る→1年生作物を植える→間に多年生作物を植える→果樹や木材価値のある木々（高さ30-40mになる）を植える→20-30年で大きな森のような畑になる（西沢他 2003: 57）



●レポートモデルの要約表現：

具体的には、焼き畑地に1年生作物、多年生作物、果樹や材木用樹木を混植する。これが20~30年すると大きな森のような畑になるという（西沢他 2003: 57）。

6

レポートの文体

6.1 「である体」の文末表現

レポートの文章は、手紙やメールなどの文章とは違う特徴をもっています。もっとも大きな特徴は、「である体」という文体です。

「である体」とは、たとえば次の（例1）のように、「～です」という文末表現の代わりに「～である」という表現を使う文章のスタイルをいいます。

（例1）

× 大きな特徴 <u>です</u> 。	→	○ 大きな特徴 <u>である</u> 。
		△ 大きな特徴 <u>だ</u> 。
		× 大きな特徴。
× この結果は重要 <u>です</u> 。	→	○ この結果は重要 <u>である</u> 。
		△ この結果は重要 <u>だ</u> 。
		× この結果は重要。

新聞などでは、「～だ」という文末表現を使うことがあります。でも、「～だ」よりも「～である」の方が読み手に客観的な印象を与えます。そのため、レポートではできるだけ「～である」を使うようにしましょう。

また、同じく新聞などでは、「大きな特徴。」「この結果は重要。」のように、名詞で文を止める表現もよく使われます。しかし、この表現はレポートでは使わないので、注意してください。

次のページの表1は、「である体」の主な文末表現について、肯定と否定、現在と過去の形を品詞別に一覧で示したものです。この表を見ればわかるように、「である体」の文章と言っても、すべてに「～である」が付くわけではありません。

レポートの文体で一番大事なことは、「である体」の文章の中に、「です・ます体」の文章表現を混ぜないことです。

「です・ます体」とは、「～です」や「～ます」を使った文末表現のことで、たとえば本書の説明文のようなスタイルがそれに当たります。「です・ます体」は、丁寧に話したり、特定の相手を思いながら語りかけるような場合にふさわしく、そのため、手紙やメールではよく使われます。しかし、レポートでは客観的・論理的に事柄を述べることが必要ですので、「です・ます体」はふさわしくありません。

表1 「である体」の主な文末表現

		名 詞	形容動詞	形容詞	動 詞
現在	肯定	特徴である。	重要である。	大きい。	わかる。
	否定	特徴ではない。	重要ではない。	大きくない。	わからない。
過去	肯定	特徴だった。	重要だった。	大きかった。	わかった。
	否定	特徴ではなかった。	重要ではなかった。	大きくなかった。	わからなかった。

レポートを書き慣れないうちは、「である体」の文章中に「です・ます体」の文章が混じってしまうことがよくあります。注意しながら書き進め、またレポートの提出前にはぜひ確認をしましょう。

6.2 「事実を述べる文」と「意見を述べる文」

説得力のある文章を書くためには、事実（データ／資料）を挙げ、それに対する自分の考えを述べていかなければなりません。つまり、レポートの中では、事実を述べることと、自分の意見を述べることが必要になります。そして大事なのは、読み手にこの2つの違いがはっきりわかるように、区別して書くことです。

実は、「事実を述べる文」と「意見を述べる文」の文末表現は、大きく異なっています。（例2）の例文を比べてみてください。

(例2)

a) 「事実を述べる文」の例：

森林破壊への対応は、「樹木を伐採しなければよい」という単純な問題ではない。

b) 「意見を述べる文」の例：

森林破壊への対応は、「樹木を伐採しなければよい」という単純な問題ではないと考える。

a)が下線部分を事実として提示しているのに対し、b)は同じ下線部分に対する書き手の意見（考え）を文末で述べています。下線部分で示したような事実は、調査から得られた結果であることもあれば、参考文献から引用した文章の場合もあります。大事なのは、書き手が事実に対して何らかの判断を加える場合、必ずそれを文章の中で示しておくことです。文末表現は、その典型的な方法です。

レポートでよく使われる「意見を述べる文」の文末表現には、たとえば次の（例3）のようなものがあります。ここでは「です・ます体」と「である体」を対比する形で示しておきます。

(例3)

<です・ます体>		<である体>
説明できる <u>でしょう。</u>	→	説明できる <u>だろう。／説明できよう。</u>
Aが原因だから <u>でしょう。</u>	→	Aが原因だから <u>だろう。／</u> Aが原因だから <u>であろう。</u>
Aについて説明 <u>しましょう。</u>	→	Aについて説明 <u>しよう。</u>
Aについて説明 <u>したいです。</u>	→	Aについて説明 <u>したい。</u>
Aを考える <u>べきではないでしようか。</u>	→	Aを考える <u>べきではないか。／</u> Aを考える <u>べきではなかろうか。</u>

6.3 「話し言葉」と「である体」

レポートで使われる表現は、日常の話し言葉で使われる表現とはかなり違います。次のページの表2に、主な違いを挙げておきます。

6.1 で、「大事なことは、『である体』の文章の中に、『です・ます体』の文章表現を混ぜないこと」と述べました。「話し言葉」についても同じことが言えます。「である体」の文章の中に「話し言葉」を混ぜないよう、十分注意してください。

この他、レポートでは、敬語表現は使いません。また、「私」という表現も使わず、「筆者」とします。(例4) を参考にしてください。

(例4)

× 田中 <u>先生</u> はAと <u>おっしゃっている</u> 。	→	○ 田中はAと <u>述べている</u> (田中 2006)。 ／田中 (2006) はAと <u>述べている。</u>
× 私はBを <u>調べさせていただいた</u> 。	→	○ 筆者はBを <u>調べた</u> 。

表2 話し言葉と「である体」の主な違い

	話し言葉	である体
動詞の接続表現	<ul style="list-style-type: none"> 調べ<u>て</u>、結果をまとめ<u>て</u>、 調べ<u>なくて</u>／調べ<u>ないで</u>、 調べて<u>いて</u>、 調べて<u>いなくて</u>、わからない。 調べた<u>けど</u>／調べた<u>けれども</u> 調べたら、 	<ul style="list-style-type: none"> 調べ、結果をまとめ、 調べ<u>ず</u>／調べ<u>に</u>、 調べ<u>ており</u>、 調べて<u>おらず</u>、わからない。 調べた<u>が</u> 調べれば／調べると
縮約表現	<ul style="list-style-type: none"> 調べなく<u>ちや</u>ならない。 特徴<u>じや</u>なかつた。 わからなくな<u>なつちやつた</u>。 調べ<u>といた</u>。 調べ<u>てる</u>。 重要だ<u>って</u>言われる。 	<ul style="list-style-type: none"> 調べなく<u>ては</u>ならない。 特徴<u>では</u>なかつた。 わからなくな<u>くなつてしまつた</u>。 調べ<u>ておいた</u>。 調べ<u>ている</u>。 重要だ<u>と</u>言われる。
疑問表現	<ul style="list-style-type: none"> なんで どんな どうやつて／どういうふうに どっち 	<ul style="list-style-type: none"> なぜ／どうして どのような どのように どちら／いずれ
接続詞	<ul style="list-style-type: none"> だから／ですから それで でも／だけど 	<ul style="list-style-type: none"> したがつて／よつて そのため／したがつて しかし／しかしながら／だが
副 詞	<ul style="list-style-type: none"> とっても／すごく いっぱい／たくさん ちょっと あんまり 	<ul style="list-style-type: none"> 非常に 多く／数多く 少し／多少 あまり

6.4 文の長さ

レポートを書くとき、1文の長さは、短い方が読み手にはわかりやすい文章になります。1つの文の長さが長くなればなるほど、文の構造や内容が複雑になります。主語と述語の関係も遠くなり、その分、読み手には理解が難しくなります。(例5) の a) b) を比べてみてください。

(例 5)

a) 1 文が長い場合 :

パーク (1994: 55–57) によれば、発展途上国による木材利用の 80%は燃料用であり、採取された薪材の量は最近大きく上昇しているため、薪材の不足とそれに関連して増大する森林伐採の問題は、今後も悪化が予想されるという。

b) 1 文が短い場合 :

パーク (1994: 55–57) によれば、発展途上国による木材利用の 80%は燃料用という。採取された薪材の量は最近大きく上昇している。そのため、薪材の不足とそれに関連して増大する森林伐採の問題は、今後も悪化が予想されている。

(例 5) の a) は 1 つの文、 b) は 3 つの文から成り立っています。でも、総文字数としては a) は 109 文字、 b) は 111 文字、わずか 2 文字しかちがいません。伝えている内容も同じなのに、どちらが理解しやすいかとなると、誰もがほぼ b) を選ぶでしょう。

レポートで書く文は、できるだけ簡潔に、短くまとめてみてください。レポートは、文学作品ではありません。巧みに飾り立てた“うまい表現”は、必要ないのです。

1 文の長さとしては、40~50 字ぐらいが努力目標だという意見があります⁽¹⁾。ちなみに、上記 (例 5) の b) では、1 文目が 44 字、2 文目が 22 字、3 文目が 45 字となっています。コンピュータのワープロソフトを使って文章を作成する場合、A4 判大の標準的な書式なら、1 行~1 行半ぐらいで句点「。」を打つことになるでしょう。

長い文が、必ずしも悪いわけではありません。必要な情報を伝えるために、長い文が必要なこともあります。論理的に文の構造が明確で、順序を追っていれば問題ない場合もあります。けれども、一般的には、文頭から 4 行も 5 行も読み進めなければ句点「。」が現れないような 1 文は、かなり読みにくいはずです。読み直して気がついたら、ぜひ途中で短い文に区切るように工夫してみてください。

その時に目安となるのは、1 文に 1 つの内容です。1 文の中に、いくつもの内容が詰め込まれていないかどうか確認してみましょう。

6.5 読点の打ち方

1 文の途中で打つ「、」のことを、読点と言います。^{とうてん} 皆さんには、どこで読点を打っていますか。だいたいのところでとか、文が長くなったら適当に、などという声をよく聞きます。でも、読点は、読み手の理解を助けるために、重要な役割を果たしているのです。次の (例 6) の a) b) を比べてみてください。

(1) 江下雅之 (2003) 『レポートの作り方』 中公新書, p.197.

(例 6)

a) 読点がない場合 :

熱帯雨林の破壊では木材の乱伐、焼畑農地の拡張、薪の採取、家畜の過剰放牧、都市化による開発などが主な原因として指摘されている。

b) 読点がある場合 :

熱帯雨林の破壊では、木材の乱伐、焼畑農地の拡張、薪の採取、家畜の過剰放牧、都市化による開発などが主な原因として指摘されている。

(例 6) の a)には 1 つも読点がありません。読んで理解しようとするときに、目が文字の上を行ったり来たりしたのではないでしょうか。これに対して、b) では読点が挿入されているため、列挙されている項目が一目でわかるようになっています。

つまり、読点には文の構造や意味のまとまりを示す働きがあり、結果として文を読みやすくしてくれるのであります。

読点を打つ場所は、いろいろ指摘されていますが、おおむね次の 7 つの場合が重要と考えられます。

①長い主語の後

例) ・薪材の不足とそれに関連して増大する森林伐採の問題は、今後も悪化が予想されている。

・材木用に伐採される場合は、そのほとんどが他国へ輸出されている。

②文の節の切れ目の後

例) ・システムはすでに限界に達し、新しい原生林開拓へ拍車がかかっている。

・今後機会があれば、これらの問題も調査してみたい。

③文頭の接続表現の後

例) ・しかし、制度として構築するにはまだ多くの課題がある。

・このように、これからの森林保護の対策では、自然保護と地域開発の両立が求められている。

④事柄を並べて示す所

例) ・熱帯雨林の破壊では、木材の乱伐、焼畑農地の拡張、薪の採取、家畜の過剰放牧、都市化による開発などが主な原因として指摘されている。 = (例 5) b)

・計画により、道路、水路、鉄道の建設が推進されている。

⑤挿入句の前後

例) ・森林破壊については、筆者が調べた限り、明確な定義文がないようである。

⑥語の切れ目が分かりにくい所

例) • 長所としては、小面積の農場で収入が得られることかつ森林伐採はわずかですむことが挙げられる。

→長所としては、小面積の農場で収入が得られることかつ森林伐採はわずかですむことが挙げられる。

⑦修飾関係がまぎらわしい所

例) • 私は辞書で調べながら資料を読む友人に質問した。

→私は辞書で調べながら資料を読む友人に質問した。(辞書で調べているのは「友人」)

→私は辞書で調べながら、資料を読む友人に質問した。(辞書で調べているのは「私」)

7

序論を書く

先に、序論とは、本論で書くことについての予告編のようなものだ、と述べました。序論で最も大切なことは、本論がどのように展開されるのかを前もって簡潔に示し、読者に心の準備をしてもらうことです。あらかじめ本論の内容を大づかみに把握しておけば、読者は本論の内容を理解しやすくなります。レポートモデルでは、序論の後半（強調文字にした部分）が主にその役目を果たしています。ちなみに、「序論」という表現は長編の論文や専門書などでは使われますが、短いレポートでは、「はじめに」などの表現の方がよいでしょう。

(例1)

1. はじめに

森林破壊は、ここ数十年間急速に世界規模で進行している。このレポートでは、森林破壊とは、人為的な要因によって森林が復元不可能な状態に陥り消失していく過程を指すものとする。森林破壊は私たちが住む地球の生活環境を悪化させる深刻な問題であり、無関心ではいられない。その一方で、実際の問題となると知らない部分が大きい。現在、世界では何が問題となり、何が必要とされているのだろうか。

以下、本論では、20世紀後半より世界的に明らかになってきた森林破壊について、その実態と要因を明らかにし、さらに森林破壊を食い止める、あるいは破壊された森林を復活させるための対策を考察する。

このレポートモデルでは、さらにふたつの事柄が序論に含まれています。第一は、「森林破壊」の定義です。レポートのテーマをきちんと定義しておくことは、これから書く内容を明確にする上で大切なことです。文献を当たってみて、テーマに関する定義が複数の文献から得られた場合、それらを比較検討し、レポートの目的に最もかなった定義を選ぶなり、自分で再構成します。その場合、定義に関する記述部分が長くなりますから、それは序論の中ではなく、本論の冒頭に持っていくほうがよいでしょう。今回は、「森林破壊」ということについて、文献の中には特に定義されていなかったので、自分で定義を考えました。

(例2)

1. はじめに

森林破壊は、ここ数十年間急速に世界規模で進行している。このレポートでは、**森林破壊とは、人為的な要因によって森林が復元不可能な状態に陥り消失していく過程を指すものとする。**森林破壊は私たちが住む地球の生活環境を悪化させる深刻な問題であり、無関心ではいられない。その一方で、実際の問題となると知らない部分が大きい。現在、世界では何が問題となり、何が必要とされているのだろうか。

以下、本論では、20世紀後半より世界的に明らかになってきた森林破壊について、その実態と要因を明らかにし、さらに森林破壊を食い止める、あるいは破壊された森林を復活させるための対策を考察する。

続いて、序論の中に書かれることとして、レポートの目的や意義を述べるということがあります。レポートモデルでは、序論の真ん中にそれが書かれています。

(例3)

1. はじめに

森林破壊は、ここ数十年間急速に世界規模で進行している。このレポートでは、**森林破壊とは、人為的な要因によって森林が復元不可能な状態に陥り消失していく過程を指すものとする。**森林破壊は私たちが住む地球の生活環境を悪化させる深刻な問題であり、無関心ではいられない。その一方で、実際の問題となると知らない部分が大きい。現在、世界では何が問題となり、何が必要とされているのだろうか。

本論では、20世紀後半より世界的に明らかになってきた森林破壊について、その実態と要因を明らかにし、さらに森林破壊を食い止める、あるいは破壊された森林を復活させるための対策を考察する。

序論の長さはレポート全体の長さに比例します。参考文献リストも含めて4ページ以内のレポートモデルでは、この程度の序論でよいでしょう。学会誌に投稿するような論文になると、序論の重要さは増し、例えば、「背景」、「問題点」、「従来の検討状況」、「本論の目的」といった流れで小見出しをつけ、研究分野における論文の意義や位置づけをはっきりさせます。皆さんのが卒論を書くときにはより詳しい序論の書き方を知る必要があるでしょう。

では次に、レポートの本論の書き方を勉強しましょう。

8

本論を書く

本論は、レポートの中心部分です。

本論を書く時には、アウトラインに沿って、その内容を盛り込みながら書いていくことになります。でも、それを単にだらだらと書くのでは、非常に読みにくい文章となってしまします。書きたい内容を論理的に、かつ読み手にわかりやすく述べるためには、内容ごとにまとまりをつけ、まとまりとまとまりの間がどのようにつながっているのかを明示することが重要です。

以下、ここでは特に「段落」というまとまりに注目し、1)段落の考え方、2)「導入の段落」と「結びの段落」、3)段落と段落のつながりを見ていきます。そして最後に、項目を挙げることばを整理しておきましょう。

8.1 段落を変える

「段落」とは、一般に、ある内容的なまとまりを持った、いくつかの文の集まりを言います。段落を変える時は、行を変え、1字分空けて書き出します。

レポートモデルの「4. 対策」から例を取り、具体的に見てみましょう。

(例 1)

自然保護と地域開発を両立させるモデルの1つとして、山田（2003）はアマゾン熱帯雨林における「アグロフォレストリー」を挙げる。「アグロフォレストリー」とはすなわち「森をつくる農業」を意味する。その方法は、日系移民による試行錯誤の経験から生み出された。具体的には、焼き畑地に1年生作物、多年生作物、果樹や材木用樹木を混植する。これが20～30年すると大きな森のような畑になるという。長所としては、多くの農業雇用を生み出すこと、小面積の農場で収入が得られること、かつ森林伐採はわずかですむことが挙げられる（西沢他 2003: 57）。他方、井上（2003: 168–169）は、森林を利用してそれを管理していく主役は、「あくまでも森林地域に居住した森林資源に頼って生活している人々である」と主張する。具体的には、東カリマンタン³⁾における地方分権化と森林政策の動向、および住民の取り組みが報告されている。近年、国際条約の締結など、住民参加をサポートする潮流が世界的にも定着しつつあるという。しかし、制度として構築するにはまだ多くの課題があり、側面支援が必要とされている。

実は、この（例 1）では、これから森林保護の対策について、大きく2つの内容が書

かれています。一つは「自然保護と地域開発の両立」について、もう一つは「地域住民主体の利用管理のシステム構築の必要性」についてです。でも、それは非常にわかりにくくなっています。

ここで、この（例1）を、それぞれ内容ごとに段落に分けてみましょう。

（例2）

自然保護と地域開発を両立させるモデルの1つとして、山田（2003）はアマゾン熱帯雨林における「アグロフォレストリー」を挙げる。「アグロフォレストリー」とはすなわち「森をつくる農業」を意味する。その方法は、日系移民による試行錯誤の経験から生み出された。具体的には、焼き畑地に1年生作物、多年生作物、果樹や材木用樹木を混植する。これが20~30年すると大きな森のような畑になるという。長所としては、多くの農業雇用を生み出すこと、小面積の農場で収入が得られること、かつ森林伐採はわずかですむことが挙げられる（西沢他2003: 57）。

他方、井上（2003: 168~169）は、森林を利用してそれを管理していく主役は、「あくまでも森林地域に居住した森林資源に頼って生活している人々である」と主張する。具体的には、東カリマンタン^②における地方分権化と森林政策の動向、および住民の取り組みが報告されている。近年、国際条約の締結など、住民参加をサポートする潮流が世界的にも定着しつつあるという。しかし、制度として構築するにはまだ多くの課題があり、側面支援が必要とされている。

これだけでも、少し読みやすくなったと思いませんか。ここでは、先の文章を、内容的なまとまりに基づいて2つの段落に分けました。2段落目の始めは、改行しました。そして、それぞれの段落の冒頭は、1字分空けてから書き始められています。

一般に、1つの段落は、3~5文、10行前後、約200字で形作られることが多いようです⁽²⁾。言い換えれば、それぐらいの文量になれば、段落を変える1つの目安となります。

段落を変えるところとしては、たとえば、次のような場合があります。

- ・新しい話題を提示することろ
- ・文章の展開が変わるところ（対比する、因果関係を示す、分類を示すなど）
- ・立場や視点が変わるところ（作者の説明と、自分の意見など）
- ・直接引用をするところ
- ・強調したい内容を述べ始めるところ

(2) 日本語教育学会編（2005）『新版 日本語教育事典』大修館書店, p.353.

これら以外にも、長すぎて読みにくいなどの場合にも、段落を変えることがあります。

英文の場合、「1つのパラグラフ (paragraph) には1つのトピック (topic) を述べる」という原則があります。これに対して、日本語の文章の場合には、その制約はかなり緩やかで、1つの段落の中に複数のトピックが述べられている場合もよく見受けられます。英文のパラグラフの原則を頭に置きながら段落を変えていくように心がけると、かなりわかりやすい文章になるでしょう。

ただし、短ければよい、というものではありません。短い段落を多くつなげすぎた文章は、逆にバラバラとして、わかりにくくなってしまいます。段落形成の基本は、内容的にも、視覚的にも、あるまとまりとして捉えやすいように、ということでしょう。

8.2 「導入の段落」と「結びの段落」

先に見た（例2）ではいきなり、「自然保護と地域開発の両立」と「地域住民主体の利用管理のシステム構築の必要性」が述べられていました。この文章の書き手にとっては、それはすでに頭の中にあることで、何も問題ないかもしれません。でも、初めてこの文章を目にする読み手にとっては、突然このような内容を突きつけられることは、面食らってしまいます。

このような状況を避けるため、これから述べる内容について、「予告」することが大事になります。

例えば、次の（例3）の第1段落のようなものです。

(例3)

森林破壊には複数の要因が絡み合っている。その裏には、その場所に住み、樹木を伐採することによって生活の糧を得ている人々がいる。今後森林を守っていくためには、自然保護を進めると同時に、地域住民の生活を支える開発が重要と言えよう。地域住民がその主体となることも求められている。これらの問題について考えておきたい。

自然保護と地域開発を両立させるモデルの1つとして、山田（2003）はアマゾン熱帯雨林における「アグロフォレストリー」を挙げる。「アグロフォレストリー」とはすなわち「森をつくる農業」を意味する。その方法は、日系移民による試行錯誤の経験から生まれた。具体的には、焼き畑地に1年生作物、多年生作物、果樹や材木用樹木を混植する。これが20～30年すると大きな森のような畑になるという。長所としては、多くの農業雇用を生み出すこと、小面積の農場で収入が得られること、かつ森林伐採はわずかですむことが挙げられる（西沢他 2003: 57）。

他方、井上（2003: 168–169）は、森林を利用してそれを管理していく主役は、「あくまでも森林地域に居住した森林資源に頼って生活している人々である」と主張する。具体的には、東カリマンタン³⁾における地方分権化と森林政策の動向、および住民の取り組みが報

報告されている。近年、国際条約の締結など、住民参加をサポートする潮流が世界的にも定着しつつあるという。しかし、制度として構築するにはまだ多くの課題があり、側面支援が必要とされている。

このように、これから森林保護の対策では、自然保護と地域開発の両立、地域住民主体の利用管理のシステム構築が求められていると言えよう。

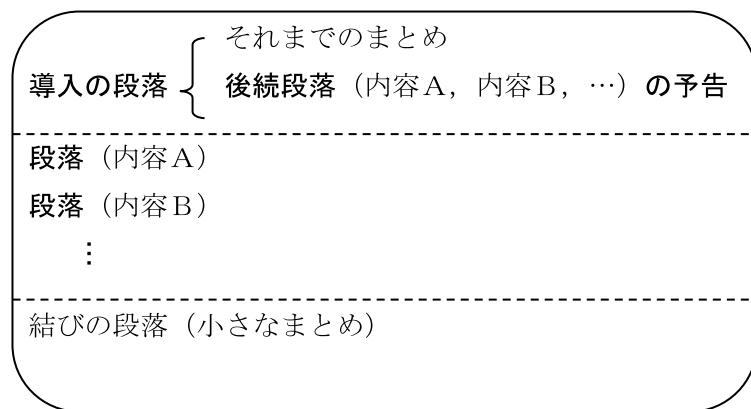
(例3) の第1段落を読んでおけば、その後、第2段落、第3段落で述べられる内容がある程度予想ができます。つまり、それだけ読み手にとっては、読みやすくなるわけです。このような役割をする段落は、「導入の段落」と呼ばれています。

導入の段落は、多くの場合、いくつかの段落の始めに書かれます。それは、章の始めであったり、節の始めであったりします。この段落の基本的な役割は、後に続く話の内容を簡潔に予告することです。でも、(例3) のように、それまでの話の内容をまとめてから、後続の予告をする場合もあります。そうすればさらに前後関係がわかりやすくなります。言うまでもなく、導入の段落で述べられている予告内容と、それに続く段落の内容は、相互に連係していなければなりません。

他方、段落の中には、それまでの話の内容をまとめる役割のものがあります。これは「結びの段落」と呼ばれています。たとえば、(例3) の最後の段落、第4段落のようなものです。文章全体のまとめは、最後の結論で述べられます。「結びの段落」は、それに至るまでに示される「小さなまとめ」と言えます。このような段落があれば、読み手はこれまで読んできた話の内容を確認することができるので、それだけ理解度が進むでしょう。

ただし、「結びの段落」は、短い文章では付けられないことも多いようです。

以上の内容をまとめれば、次のようにになります。**太字**で示した部分が、特に重要なところです。



8.3 段落と段落のつながり

ここまで、段落を変えることの重要性、役割の異なる段落の種類について見てきました。最後に、段落と段落のつながりをはっきりさせることの重要性について見ておきましょう。実は、上記の（例3）では、接続詞や接続詞的な表現が、ほとんど使われていませんでした。ここで言う「接続詞」「接続詞的表現」とは、たとえば次のようなものを言います。

接続詞： しかし、したがって、また、たとえば、…

接続詞的表現： 以上のように、以下、具体的には、このように、…

これらを（例3）に入れ込むと、たとえば次の（例4）のようになります。

（例4）

以上のように、森林破壊には複数の要因が絡み合っている。しかし、その裏には、その場所に住み、樹木を伐採することによって生活の糧を得ている人々がいる。したがって、今後森林を守っていくためには、自然保護を進めると同時に、地域住民の生活を支える開発が重要と言えよう。また、地域住民がその主体となることも求められている。以下、これらの問題について考えておきたい。

自然保護と地域開発を両立させるモデルの1つとして、山田（2003）はアマゾン熱帯雨林における「アグロフォレストリー」を挙げる。「アグロフォレストリー」とはすなわち「森をつくる農業」を意味する。その方法は、日系移民による試行錯誤の経験から生み出された。具体的には、焼き畑地に1年生作物、多年生作物、果樹や材木用樹木を混植する。これが20～30年すると大きな森のような畠になるという。長所としては、多くの農業雇用を生み出すこと、小面積の農場で収入が得られること、かつ森林伐採はわずかですむことが挙げられる（西沢他2003: 57）。

他方、井上（2003: 168–169）は、森林を利用してそれを管理していく主役は、「あくまでも森林地域に居住した森林資源に頼って生活している人々である」と主張する。具体的には、東カリマンタン³⁾における地方分権化と森林政策の動向、および住民の取り組みが報告されている。近年、国際条約の締結など、住民参加をサポートする潮流が世界的にも定着しつつあるという。しかし、制度として構築するにはまだ多くの課題があり、側面支援が必要とされている。

このように、これから森林保護の対策では、自然保護と地域開発の両立、地域住民主体の利用管理のシステム構築が求められていると言えよう。

（例3）に比べて（例4）は、ずいぶん読みやすくなつたのではないか。

その理由は、接続詞や接続詞的表現の挿入によって、段落と段落の関係、文と文の関係

が、はっきりとわかるようになったためと考えられます。特に、下線で示した表現は、段落と段落の関係を示しています。

接続詞、接続詞的表現は、必ず使わなければならないものではありません。現に、(例3)では、これらがほとんど使われていないにも拘わらず、皆さんには(例4)と同じような内容が理解されていたことでしょう。

その理由は、皆さんのが文章を読むときには、2つの文や2つの段落を見れば、その2つ間に何らかの関係を予測しながら読んでいることがあります。ただ、ほとんどの場合、それは自覚していないことでしょう。また、「その主体」「その方法は」などのように、指示詞によっても、前後のつながりを読みとることができます。

ちなみに英文では、接続詞を使いすぎないように指導されています。

けれども、効果的に接続詞や接続詞的表現を使うことによって、前後関係をはっきりと示すことができます。読み手にとっても、読み進めるときには、理解の大きな手がかりになります。内容が大きく変わるところなど、要所ではぜひ使ってみてください。

8.4 項目を挙げることは

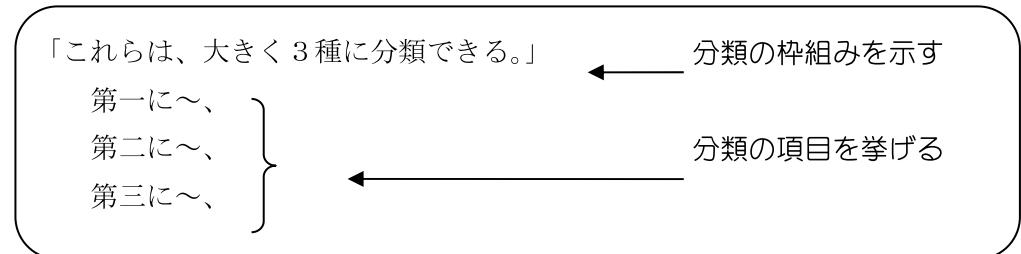
先に8.2で、導入の段落では、後に続く話の内容を完結に予告する役割があると述べました。予告する文に関連させて使うと便利なのが、「項目を挙げることば」です。

たとえば、次の(例5)です。これは、第3章の始めの段落(導入の段落)です。

(例5)

熱帯雨林の破壊では、木材の乱伐、焼畑農地の拡張、薪の採取、家畜の過剰放牧、都市化による開発などが主な原因として指摘されている(大塚2005:8;長谷川1996:46-47;気象庁のホームページ)。これらは、大きく3種に分類できる。すなわち、第一に商業用を目的とした伐採、第二に農耕地開発を目的とした伐採、第三に輸送道路建設を目的とした伐採である。以下、それぞれ具体的に見てみよう。

太字で示した部分を図示すると、次のようになります。



ここでは、大きな分類の枠組みを述べてから、具体的な分類の項目を挙げています。

このように、初めに分類の枠組みを示しておけば、この文章の読み手は、そのような枠組みを頭の中に描きながら、先を読み進めることができます。文章を書く人にとっても、それを頭にイメージしておく方が、書き進めやすくなります。

分類の項目を挙げる方法（「第一に～」「第二に～」「第三に～」）は、各項目の内容が短い語句ならば、上記のように1文の中にいっしょに埋め込むこともできるでしょう。けれども、項目の説明が長くなる場合には、それぞれ文、または段落に分けた方がわかりやすくなります。ちなみに、レポートモデルのこの部分については、各項目の説明が長いため、(1)、(2)、(3)と節に分けて具体的に説明が述べられています。

この他に、時間を追って項目を挙げる方法もあります。「まず～」「次に～」「さらに～」「最後に～」というものです。レポートモデルの中では、「5. おわりに」の章の中で、これらの表現が使われています。確認してみてください。

9

結論を書く

結論は、全体の総まとめをする部分であり、「終わりに」や「結語」、「結び」、「まとめ」などと記されます。

一般に学術論文では、論文本体とは別に全体の内容をまとめた「要旨」を付けます。しかし、いわゆるレポートに「要旨」をつけることはまずありません。そのため、結論部分は、ここだけを読んでも全体の主要な内容を把握できるように書いておく必要があります。

結論に含まれる内容は、主に次の2点です。

- 1) 本論のまとめ
- 2) 今後の課題

具体的にレポートモデルを見てみましょう。

(例1)

5. おわりに

以上、このレポートでは、森林破壊の実態とその要因、およびその対策について考察してきた。まず、森林破壊の実態として、発展途上国の熱帯雨林において森林が急速に減少していること、また熱帯以外の地域でも酸性雨の被害により森林破壊が進んでいることを見た。次に、熱帯雨林の破壊に焦点を絞り、その破壊の要因として、商業用を目的とした伐採、農用地開発を目的とした伐採、輸送道路建設を目的とした伐採があることを指摘した。最後に、今後の森林保護の対策として、自然保護と地域開発の両立、および地域住民主体の利用管理システムの構築の必要性を述べた。

このレポートでは、森林破壊からもたらされる洪水や、干ばつ、地球温暖化現象、酸性雨などの問題について検討できなかった。今後機会があれば、これらの問題も調査してみたい。

(例1)では、第1段落において「本論のまとめ」が述べられ、第2段落において「今後の課題」が述べられています。以下、順に見てみましょう。

9.1 「本論のまとめ」の書き方

「本論のまとめ」は、すなわち、本論で明らかにした内容の要約とも言えるものです。

「本論のまとめ」を述べる時に大事なことは、次の2点です。

- 1) 序論で予告した内容と、本論の内容、本論のまとめの内容が正しく呼応していること。
- 2) 本論で述べていない新しい情報を、結論で提出しないこと。

まず、1)から見てみましょう。

序論の最後には、次の（例2）のように、本論の予告がなされていました。

（例2）

以下、本論では、20世紀後半より世界的に明らかになってきた**森林破壊について、その実態と要因**を明らかにし、さらに森林破壊を食い止める、あるいは破壊された森林を復活させるための**対策**を考察する。

（例2）の太字で示された部分は、本論の「2. 森林破壊の実態」「3. 森林破壊の要因」「4. 対策」に対応してきたところです。これに対して、結論の第1文では、次の（例3）のように述べられています。

（例3）

以上、このレポートでは、**森林破壊の実態とその要因、およびその対策**について考察してきた。

序論（例2）と結論（例3）の内容が、正しく呼応していることがわかります。

もしこれが、（例4）のようだったらどうでしょうか。

（例4）

以上、このレポートでは、**森林破壊の実態とその要因、およびそれが及ぼす影響**について考察してきた。

（例4）の結論（下線部分）は、序論（例2）と正しく呼応していません。このレポートモデルでは、森林破壊が及ぼす影響については論じていないからです。したがって、このままでは、論理的にねじれたレポートになってしまいます。

もし、本論において、本当に森林破壊が及ぼす影響について論じてきたのであれば、むしろ序論の方を書き直す必要があります。

レポートで中心となるのは、あくまでも「本論の内容」です。それに合わせて、「序論の予告内容」と、「本論のまとめ」が正しく呼応するように書きます。この3つの関係を確認する作業は、非常に大事なプロセスです。

序論の予告内容 ⇔ **本論の内容** ⇔ **本論のまとめ**

この時点で、「序論の予告内容」や「本論のまとめ」を修正することは決して悪いことはありません。「本論の内容」をしっかり見直して、確認や修正を行ってください。

次に、2)本論で述べていない新しい情報を、結論で新たに提出しないこと、という点を見ておきましょう。結論で述べられることは、あくまでも本論で述べられたことのまとめです。ここでいきなり新しい情報を出されれば、読み手は面食らってしまいます。もしも新しい情報を書きたいのであれば、本論のアウトラインを修正して、本論の中に組み込むべきです。あるいは、本論の中に組み込めないのであれば、「今後の課題」として書けばよいでしょう。

以上、「本論のまとめ」では、本論で明らかにした内容が、論理的に、かつ簡潔に要約されているか、もう一度確認をしてみてください。

9.2 「今後の課題」の書き方

今後の課題として取り上げる内容は、大きく2つの種類があります。

- 1) 今回、取り上げること（扱うこと）ができなかった内容
- 2) 今回の分析・考察を行って、今後必要だとわかった内容

1)をはっきりと書くことは、決して恥ずかしいことではありません。それは、自分の行った分析・考察の範囲を明示することであり、他の人がその分析・考察の妥当性を検証するときにも重要な枠組みとなります。

他方 2)は、今回の分析・考察を行ったからこそ生まれてきた課題であり、今後の発展性を示すものです。それを追求していけば、卒業論文など、もっと大きい研究テーマになることもあるでしょう。

1)にしろ2)にしろ、今回のレポートが書き手にとってどのような位置づけを持つのかを、読み手に示す役割を持っています。レポートの重要性や意義を伝える役割も果たします。「本論のまとめ」を書いた時点で「終わった」と思わずには、ぜひ「今後の課題」についてもしっかりと考えてみてください。それは、レポートの質を高める最後のステップと言えるでしょう。

レポートの中に、図や表を用いるときに重要なのは、次の2点です。

- 1) それぞれの図や表に、通し番号と題名（キャプション）を付けること。
- 2) 本文中に、図や表についての自分の説明（解釈）を書くこと。

以下、順に見てみましょう。

10.1 図や表の通し番号と題名

図と表は、別のものとして扱います。

それぞれ分けて、図1、図2、… 表1、表2、… のように、通し番号を付けます。

そして、通し番号の後には、図や表の内容がよくわかるような題名をつけます。

たとえば、レポートモデルでは、次のように、表が挙げられています。

(例1)

表1 途上国グループにおける森林消失面積（年平均）

	1980~90	1990~95
アフリカ	— 4.28	— 3.75 (−0.71%)
アジア・オセアニア	— 4.41	— 3.47 (−0.67%)
中 南 米	— 6.77	— 5.81 (−0.60%)
途上国全体	—15.46	—13.03 (−0.65%)

単位：100万ha.

資料：FAO “States of the World’s Forest 1997” より作成。
(町田 (2000: 117) より引用)

(例1) では、表の上に、「表1 途上国グループにおける森林消失面積（年平均）」と記されています。これが、通し番号と題名の部分です。

この表は、参考文献の町田 (2000: 117) に掲載されていたものです。(例1) では、通し番号はこのレポートのために新しく付けましたが、題名は町田 (2000: 117) が付けていたものをそのまま挙げています。このように、図や表を引用するときは基本的に、題名は元の文献で用いられていたものをそのまま引用します。

他方、表の下には、「(町田 (2000: 117) より引用)」と記されています。図であれ表であれ、参考文献から引用する場合には、本文の引用と同様に、必ず出典を書いておかなければ

ばなりません。その際、参考文献の図や表に付けられている注も忘れずに、いっしょに引用しておきます。(例 1) では、「単位：100 万 ha. 資料：FAO “States of the World’s Forest 1997” より作成.」という部分がそれに該当します。

卒業論文などの長い論文では、章ごとに図と表の通し番号を付けることもあります。例えば、第 3 章の 2 番目に挙げる図なら、「図 3.2」あるいは「図 3-2」のように付けます。しかし、レポートなど短い場合には、章ごとではなく、全体を通しての番号で問題はありません。

なお、通し番号と題名を書く位置は、図の場合には図の下に、表の場合は表の上に付ける、というルールがある学問領域もあります。自分の専門領域で確認してみましょう。

10.2 図や表の説明

図や表を挙げる場合には、それをレポートの中に入れただけで終わってはいけません。必ず、本文の中で、その図や表からどのようなことがわかるのかを自分の言葉で説明（解釈）する必要があります。図や表は、あくまでも、本文の文章の理解を助けるために用いられるものです。むしろ、図や表がなくても伝えたい内容がわかるように、本文中に説明を書きましょう。

たとえば、レポートモデルでは（例 2）のように、表 1 について説明がされています。

(例 2)

さらに、町田（2000: 117）は、FAO（世界食料農業機関）のデータに基づき、開発途上国における熱帯雨林の消失実態を、表 1 にまとめている。この表から、大きく 3 つの地域に区分された開発途上国の中でも、特に、広大なアマゾン熱帯雨林を擁する中南米における森林破壊が大きいことがわかる。

図や表の説明をするときに重要なのは、次の 2 点の順序です。

- ①まず、その図や表が何を表しているのかを述べ、その後に、その図や表から何がわかるのかを述べる。
- ②図や表からわかることを説明するときには、まず大きな特徴から述べ、その後に、細かい特徴について述べる。

上記の①と②は、読み手にわかりやすい説明文の基本とも言えます。

11

レポートを提出する前に

ひとまず、レポートの原稿を序論から結論まで書き上げました。つい、これで終わったと思いがちですが、残念ながらまだ完成ではありません。あと一息、原稿の見直しと、仕上げの作業が必要です。

11.1 原稿の見直し

次の点について、原稿を見直してみましょう。

- 序論と本論と結論の内容が、相互に関連しているか。
- 段落が、適当なところで変えられているか。
- 「である体」の文章に、「です・ます体」や「話し言葉」が混ざっていないか。
- 句点「。」や読点「、」の打ち方は適切か。
- 誤字（まちがった文字）・脱字（書き落とした文字）はないか。
- 参考文献を正しく引用しているか。
- 参考文献表には、本文で引用した文献がすべて挙げられているか。

11.2 仕上げ

仕上げの作業には、1)レポートの題の確定、2)表紙の作成、3)ページ番号の記入、4)綴じる、という段階があります。

(1) レポートの題の確定

レポートを書くために、これまで「森林破壊」というテーマについて考え続けてきました。ただし、テーマとレポートの題は必ずしも同じではありません。提出前には、もう一度レポート全体を見直し、そのレポートにふさわしい題を決定します。そのときの題は、レポートの内容の一部を示すものではなく、レポート全体を示すような題をつけましょう。

(2) 表紙の作成

レポートにつける表紙を作成します。表紙には、題と名前の他に、授業科目名、担当教員名、自分の所属や学籍番号、提出日などを書きます。レポートモデルの表紙を参考にしてください。

(3) ページ番号の記入

ページ番号は、表紙にはつけません。本文が始まるページから、参考文献表も含めた本文の最後のページまで、一連のページ番号をつけます。

(4) 練じる

書き上げたレポートは、ページの順番に間違いがないことを確認してから、ホッチキスでしっかりと全部を1つに練じましょう。練じる用具にはゼムクリップなどもありますが、外れやすいのでおすすめできません。練じる場所は、左上が一般的です。

さあ、これで完成です！

よくがんばりましたね。

あとは、指定されたレポートの締め切りに遅れないように提出しましょう。

＜参考文献＞

- アカデミック・ジャパニーズ研究会編 (2002) 『大学・大学院 留学生の日本語 ③論文読解編』 アルク.
- アカデミック・ジャパニーズ研究会編 (2002) 『大学・大学院 留学生の日本語 ④論文作成編』 アルク.
- 江下雅之 (2003) 『レポートの作り方』 中公新書.
- 学習技術研究会編 (2002) 『知へのステップ—大学生からのスタディ・スキルズー』 くろしお出版.
- 木下是雄 (1981) 『理科系の作文技術』 中公新書.
- 國文學編集部編 (1993) 『文章作法便覧』 學燈社.
- 斎山弥生・沖田弓子 (1996) 『研究発表の方法—留学生のためのレポート作成・口頭発表準備の手引き—』 産能短期大学国際交流センター.
- 田中潔 (1994) 『手ぎわよい科学論文の仕上げ方 (第2版)』 共立出版.
- 二通信子・佐藤不二子 (2003) 『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』 スリーエーネットワーク.
- 日本語教育学会編 (2005) 『新版 日本語教育事典』 大修館書店.
- 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 (1997) 『大学生・留学生のための論文ワークブック』 くろしお出版.

付 錄

レポートモデル



森林伐採によって開発されたブラジル西部・パンタナール湿地の牧場
乾季を利用して大規模に牛が放牧されている
(写真撮影： 宮岡 邦任 氏)

<表紙>

授業科目名 地球環境論

担当教員 上浜 津太郎 先生

森林破壊の現状と対策

所 属 総合科学部 地球環境学科 1年

学籍番号 612035

氏 名 林 花 恵

提出日 2006年10月5日

1. はじめに

森林破壊は、ここ数十年間急速に世界規模で進行している。このレポートでは、森林破壊とは、人為的な要因によって森林が復元不可能な状態に陥り消失していく過程を指すものとする。森林破壊は私たちが住む地球の生活環境を悪化させる深刻な問題であり、無関心ではいられない。その一方で、実際の問題となると知らない部分が大きい。現在、世界では何が問題となり、何が必要とされているのであろうか。

以下、本論では、20世紀後半より世界的に明らかになってきた森林破壊について、その実態と要因を整理し、さらに森林破壊を食い止める、あるいは破壊された森林を復活させるための対策を考察する。

2. 森林破壊の実態

石弘之は、東欧を訪ねて目の当たりにした森林破壊の状況を次のように描写し、それを「森林の墓場」と呼んでいる。

枯れ木、そのまた向こうにも枯れ木の山がつづく。骨格がむき出しになった立ち木と、林床に積み重なる倒木。黒く変色した幹の皮がむけて、白い肌がむき出しになっている。山麓でさえずっていた鳥の鳴き声が聞こえない。風が通り過ぎると、葉ずれの代わりに枯れ枝がカタカタ鳴る。遠くからギーッと枯れ木の倒れる悲鳴が聞こえてくる（石 2002: 145）。

これらの樹木は、酸性雨により枯死するに至ったものであり、チェコ、ポーランド、旧東ドイツの国境地帯に、幅数十km、長さ数千kmにわたって広がっている。

そればかりではない。地球上に 1,900 万 km² 存在し、世界の森林面積の半分を占める熱帯雨林が、毎年本州の総面積 23 万 km² の約 3 分の 2 に当たる 14.6 万 km² ずつ失われていると言う（大塚 2005: 8）。また、長谷川（1996: 46-47）は、1980 年に 19 億 1,000 万 ha (1,910 万 km²) もあった熱帯雨林が、1990 年には 17 億 5,600 万 ha (1,756 万 km²) となり、10 年間の年平均で約 1,540 万 ha (15.4 万 km²) が減少していると指摘している。さらに、町田（2000: 117）は、FAO（世界食料農業機関）のデータに基づき、開発途上国における熱帯雨林の消失実態を、表 1 にまとめている。この表から、大きく 3 つの地域に区分された開発途上国

表 1 途上国グループにおける森林消失面積（年平均）

	1980~90	1990~95
アフリカ	- 4.28	- 3.75 (-0.71%)
アジア・オセアニア	- 4.41	- 3.47 (-0.67%)
中 南 米	- 6.77	- 5.81 (-0.60%)
途上国全体	- 15.46	- 13.03 (-0.65%)

単位：100 万 ha.

資料：FAO “States of the World’s Forest 1997” より作成。
(町田 (2000: 117) より引用)

の中でも、特に、広大なアマゾン熱帯雨林を擁する中南米における森林破壊が大きいことがわかる。

このような森林破壊への対応は、「樹木を伐採しなければよい」という単純な問題ではないと考える。以下、熱帯雨林に焦点を絞り、森林破壊の要因と対策を検討する。

3. 热帯雨林の破壊の要因

熱帯雨林の破壊では、木材の乱伐、焼畑農地の拡張、薪の採取、家畜の過剰放牧、都市化による開発などが主な原因として指摘されている（大塚 2005: 8; 長谷川 1996: 46-47; 気象庁のホームページ³⁾）。これらを分類すると、3種に大別できる。すなわち、第一に商業用を目的とした伐採、第二に農耕地開発を目的とした伐採、第三に輸送道路建設を目的とした伐採である。以下、各々、具体的に見てみよう。

(1) 商業用を目的とした伐採

商業用を目的とする場合には大きく、材木用と、エネルギー源としての薪用がある。

材木用に伐採される場合は、そのほとんどが他国へ輸出されている。この伐採には、合法的なものだけでなく、非合法的な伐採も含まれる。小池（2003: 106）によれば、アマゾンでは違法伐採、密輸が横行しており、85%から90%が違法伐採になるという。インドネシアの場合でも、「政府が許可した伐採量と輸入国の統計の差から違法伐採を推定すると、生産量の7割に達する」という⁴⁾。

他方、パーク（1994: 55-57）によれば、発展途上国による木材利用の80%は燃料用という。採取された薪材の量は最近大きく上昇している。そのため、薪材の不足とそれに関連して増大する森林伐採の問題は、今後も悪化が予想されている。

(2) 農用地開発を目的とした伐採

農用地開発を目的とした伐採には、耕作地開発と、牧場開発の場合がある。前者はさらに、焼き畑農地の開発と、大規模プランテーション開発に分けられる。

まず、耕作地開発から見てみよう。大塚や市川によれば、現地住民による焼き畑農地は、ますます拡大しているという（大塚 2005: 8; 市川 2003: 45）。ただし、ここで問題なのは、いわゆる伝統的な焼き畑耕作ではない。焼き畑耕作は、かつては低人口密度のもと、長い休閑期間をおきながら持続的に行われてきた。しかし、そのシステムはすでに限界に達し、新しい原生林開拓へ拍車がかかっているという。加えて、山元（1989: 159）は、大規模なプランテーション開発や、家畜の過剰放牧などの問題が「原住民の昔からの焼き畑農業を凌駕している」と指摘する。これらの背景には、開発途上国における貧困や急激な人口増加などの問題が存在する。

3) <http://www.kishou.go.jp/know/whitep/3-3-5.html> (2005年12月9日検索)

4) 加藤学「<私の視点> 違法伐採『疑わしい木材』の監視を」朝日新聞, 2004年10月20日, 朝刊, 14面 (朝日新聞記事データベース: 聞蔵 DNA for Libraries より検索)

次に、牧場開発は、アマゾンにおける森林消失の最大の要因となっている。牧場経営には、少なくとも 1000ha 以上の土地が必要とされる（西沢他 2003: 57）。そのため、大規模な森林伐採が行われてきた。ただし、小池（2003: 105–106）によれば、1988 年以降、アマゾンでの牧場建設は、むしろスローダウンしているという。

(3) 輸送道路建設を目的とした伐採

小池（2003: 105–106）は、今後アマゾンでの森林破壊の最大の要因として、大豆その他の農作物の生産と、それらの輸送のための道路建設を予想する。アマゾンは、農産物や木材の世界的な輸出地帯になりつつあり、輸送網の整備が進められてきた。現在も「進めブラジル」という多年度計画により、道路、水路、鉄道の建設が推進されている。そのような状況下、環境破壊は確実に進んでいるという（西沢他 2003: 54）。

4. 対策

以上のように、森林破壊には複数の要因が絡み合っている。しかし、その裏には、その場所に住み、樹木を伐採することによって生活の糧を得ている人々がいる。したがって、今後森林を守っていくためには、自然保護を進めると同時に、地域住民の生活を支える開発が重要と言えよう。また、地域住民がその主体となることも求められている。以下、これらの問題について考えておきたい。

自然保護と地域開発を両立させるモデルの 1 つとして、山田（2003）はアマゾン熱帯雨林における「アグロフォレストリー」を挙げる。「アグロフォレストリー」とはすなわち「森をつくる農業」を意味する。その方法は、日系移民による試行錯誤の経験から生み出された。具体的には、焼き畑地に 1 年生作物、多年生作物、果樹や材木用樹木を混植する。これが 20~30 年すると大きな森のような畑になるという。長所としては、多くの農業雇用を生み出すこと、小面積の農場で収入が得られること、かつ森林伐採はわずかですむことが挙げられる（西沢他 2003: 57）。

他方、井上（2003: 168–169）は、森林を利用してそれを管理していく主役は、「あくまでも森林地域に居住した森林資源に頼って生活している人々である」と主張する。具体的には、東カリマンタン⁵⁾における地方分権化と森林政策の動向、および住民の取り組みが報告されている。近年、国際条約の締結など、住民参加をサポートする潮流が世界的にも定着しつつあるという。しかし、制度として構築するにはまだ多くの課題があり、側面支援が必要とされている。

このように、これから森林保護の対策では、自然保護と地域開発の両立、地域住民主体の利用管理のシステム構築が求められていると言えよう。

5) カリマンタン島（ボルネオ島）におけるインドネシア領の 1 州。

5. おわりに

以上、このレポートでは、森林破壊の実態とその要因、およびその対策について考察してきた。まず、森林破壊の実態として、発展途上国の熱帯雨林において森林が急速に減少していること、また熱帯以外の地域でも酸性雨の被害により森林破壊が進んでいることを見た。次に、熱帯雨林の破壊に焦点を絞り、その破壊の要因として、商業用を目的とした伐採、農用地開発を目的とした伐採、輸送道路建設を目的とした伐採があることを指摘した。最後に、今後の森林保護の対策として、自然保護と地域開発の両立、および地域住民主体の利用管理システムの構築の必要性を述べた。

このレポートでは、森林破壊からもたらされる洪水や、干ばつ、地球温暖化現象、酸性雨などの問題について検討できなかった。今後機会があれば、これらの問題も調査してみたい。

<参考文献>

- 石弘之 (2002) 『私の地球遍歴：環境破壊の現場を求めて』 講談社.
- 市川光雄 (2003) 「環境問題に対する3つの生態学」 池谷和信編『地球環境問題の人類学：自然資源へのヒューマンインパクト』 世界思想社, pp.44-64.
- 井上真 (2003) 「揺れ動く住民参加の森林政策」 池谷和信編『地球環境問題の人類学：自然資源へのヒューマンインパクト』 世界思想社, pp.141-170.
- 大塚徳勝 (2005) 『知っておきたい環境問題』 共立出版.
- 小池洋一 (2003) 「アマゾンの21世紀 第2回：アマゾンの開発と環境保護」『地理』vol.48, no.3, pp.102-107.
- 西沢利栄・小池洋一・本郷豊・山田祐彰 (2003) 「新連載 アマゾンの21世紀 第1回：座談会 いま、なぜアマゾンか」『地理』 vol.48, no.2, pp.54-61.
- パーク, ク里斯・C.著, 犬井正訳 (1994) 『熱帯雨林の社会経済学』 農林統計協会.
- 長谷川三雄 (1996) 『人間と地球環境』 産業図書.
- 町田修三 (2000) 「森林破壊と国際貿易—現状と対策—」『日本貿易学会年報』 vol.37, pp.116-121.
- 山田祐彰 (2003) 「アマゾンの21世紀 最終回：アマゾン熱帯林とアグロフォレストリー」『地理』 vol.48, no.6, pp.100-105.
- 山元龍三郎 (1989) 『気象異常：フロン・酸性雨・森林破壊・温暖化…』 集英社.

あとがき

本書は、大学に入学した大学生が初めてレポートを書くときに、参考となる手引き書を目指して執筆されたものである。

大学教員からは、「最近の学生はレポートが書けない」「レポートの形を成していない」「日本語表現すらおぼつかない」という嘆きの声が年々大きくなっている。

しかしながら、高校時代に小論文の作成指導を受けていない学生は多い。いわゆる“レポート”というものも、書いたことはもちろん、見たこともないという学生がほとんどである。にもかかわらず、大学に入学するやいなや、成績評価を受ける手段として当然のようにレポートの提出が課せられる。学生側からしてみれば、書き方もわからないまま書かれるのだから、「そんなこと言われても……」というのが心情であろう。

それならば、その方法を指南しようと試みたのが本書である。何よりも、これまで小中学校で書いてきたような主観的な“感想文”ではなく、“論理的文章”、すなわち論理を組み立てながら客観的に記述する文章の書き方を知ってほしいと考えた。

すでに巷には、レポートや論文の書き方を謳った書物は数多くある。その中でも本書は、あくまでも大学生が参考とする入門書として、次の3点を目指した。

- (1) レポートとはどのようなものかを具体的にイメージしてもらい、作成手順の流れに沿って解説を行うこと。
- (2) できるだけ短時間で概要をつかめるように、必要最小限の項目立てにとどめ、特に注意すべきポイントのみを解説すること。
- (3) 一度で完璧な習得を期待するのではなく、手元に置いて必要なときにページをめくることで、その都度確認できればよしとすること。

本書は、いわゆる「学術論文」の執筆レベルを望むものではない。学問の領域は多岐に渡り、それらをすべて網羅できるような解説はおそらく不可能であろう。学術論文の書き方は、それぞれの学生が自分の専門分野を特定し、その世界に入ってから学べばよいと考える。

また、本書ではできるだけ文系・理系の区別なく、両者に重なる基本的な領域を取り上げよう意識したつもりである。しかし、著者が文系であることから、どうしても文系寄りの解説になったことは否めない。この点についても、各教員がそれぞれの専門分野において補足指導していただければと思う。

大学という世界は、そこに身を置く教員にとってはごく当たり前の世界である。しかし、初めて大学に入学してきた学生たちには、それまでとは異なる未知の世界が広がることであろう。

学生たちにとって本書が、新しい世界に進むための一つの道しるべとなれば幸いである。

2006年3月

著者

初版執筆者

はなみ まきこ
花見 槇子

かしま めぐみ
鹿嶋 恵

だいがくせい 大学生のための レポート作成ハンドブック

2023 年 4 月 1 日 改訂版第 6 刷発行

編 集 三重大学全学共通教育センター

レポート作成ハンドブック編集委員会

著作権者 国立大学法人 三重大学

発 行 者 国立大学法人 三重大学全学共通教育センター

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577 番地

TEL 059-231-9344 URL <http://www.ars.mie-u.ac.jp/>

印刷・製本 三重大学生活協同組合 印刷部

三重大学全学共通教育センター